第1章
事業の総括評価

趣　　旨
評価結果
総括評価

趣旨

国際青年育成交流事業は、日本と諸外国の青年との交流を通じて、青年相互の友好と理解を促進し、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神のかん養と国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会で指導性を発揮できる青年を育成することを目的として実施している。

平成28年度（第23回）は、ドミニカ共和国、ラオス人民民主共和国及びリトアニア共和国の3か国を相互交流の対象国として実施した。また、これらの相互交流国に加えて、オーストリア共和国、バーレーン王国及びパプアニューギニア独立国の3か国からも外国青年を招へいした。

（外国青年招へい事業については、別途、報告書を作成している。）

また、日本青年の育成の観点から、内閣府青年国際交流事業の共通の目的は「青年の国際的視野を広げ、国際協調やリーダーシップを持った青年を育成する。国境を越えた青年相互の友好と理解を促進し、長期にわたる緊密な人的つながりを形成する。」ことであり、事業参加によりコミュニケーション力や異文化対応力等の能力向上が図られることをねらいとしている。

本事業では、以上の目的を達成するため、国家及び地方行政への表敬訪問、「環境、教育、文化」を中心テーマとしての同世代の青年との合宿型ディスカッションプログラム、首都に加え複数の地方都市における地元青年との交流等様々なプログラムを実施している。日本青年の派遣事業については、人的交流の重視を基本としつつ、相手国の多様性を吸収するとともに日本文化の発信が可能な内容に組立てるべく、交流対象国に対して要望を出しながら、毎年見直しを行っている。

今回、本年度事業の成果を測るため、日本参加青年及び外国招へい青年（6か国）全員を対象として事業終了時にアンケート評価を行うとともに、日本参加青年に対しては、事前研修及び帰国後研修時に、能力向上に関する自己評価の変化について比較調査を行った。

本報告書では、日本青年派遣事業に焦点を当てて評価する。

事業終了時のアンケート評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。日本青年の自己評価の変化に関する比較調査については、他の調査との比較の観点から6段階評価（評価の高い方から6～1）を基本とした。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「第3章　資料編」参照。

評価結果

事業目的の達成度

①日本と交流相手国の相互理解の促進

＜日本参加青年＞

「本事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか。」との問いに対して、5段階評価の3（ある程度深まったと思う）以上をつけた日本参加青年は100％だった。内訳は、4（良かった）以上をつけた青年が83％で、高い評価であった。

＜招へい外国青年＞

「このプログラムは、日本人との相互理解に役立つと思いますか。」との問いに対して、招へい外国青年の5段階評価の平均値は4.7であり、非常に高い評価であった。

また、「プログラムへの参加後、日本に対する印象はどのように変化しましたか。」との問いには、5段階評価の平均値は4.2であり、高い数値を示している。いずれも、例年安定して4以上の高い評価を得ている。

②日本と交流相手国の友好の促進

「本事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか。」との問いに対して、5段階評価の3（ある程度深まったと思う）以上をつけた日本参加青年は98％だった。

なお、事業に参加した動機について、42名中34名が「国際交流事業に興味を抱いたため」と回答していることから、訪問国の人々との交流への関心が比較的高いことがうかがわれる。

③プログラムへの満足度

訪問国プログラムの内容についての全体評価は、4（良かった）以上の評価が100％であり、非常に高かった。特に、「地元青年との交流プログラム」への評価は、4（大変良かった）以上が90％であった。

④社会貢献活動への意欲

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。」との問いに対して、「意欲に加え、具体的な取組のイメージを持った。」との回答は21％、「充分に意欲を持った。」が48％、「ある程度意欲を持った。」が21％、「関心を持つようになった。」との回答までを含めると100％となり、意欲の向上に多大な影響があったことが認められた。

⑤事業参加による参加青年の将来への影響

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。」との問いに対して、「とても役立つと思う。」との回答は81％、「役立つと思う。」が17％、「ある程度役立つ。」が2％であり、全員が役に立つとの認識である。

日本参加青年の成長（自己評価の向上度）

本事業の目的の一つである、日本青年の自己評価の向上について、項目別に具体的に検証したところ、次のような結果になった。

「コミュニケーション能力」については、
4.2から4.7となり、0.5ポイントの増。

「異文化に対応する能力」については、
4.5から5.1となり、0.6ポイントの増。

「チャレンジ精神」については、
4.4から4.8となり、0.4ポイントの増。

「問題解決能力」については、
3.6から4.3となり、0.7ポイントの増。

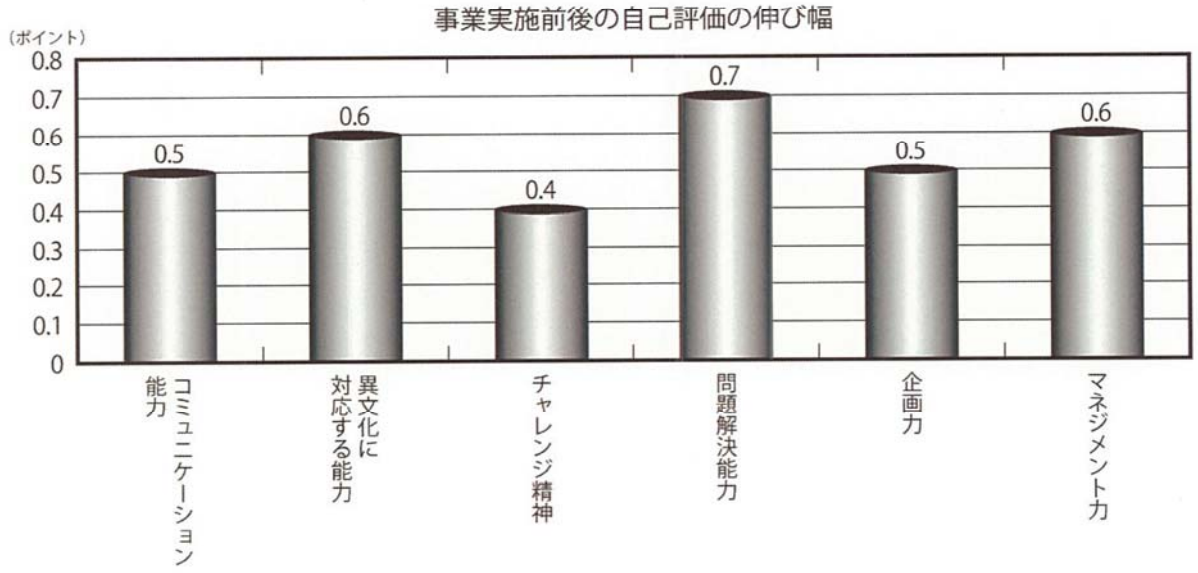
「企画力」については、
3.5から4.0となり、0.5ポイントの増。

「マネジメント力」については、
3.5から4.1となり、0.6ポイントの増。

最も伸び幅が大きかったのは「問題解決能力」であり、その理由は、プログラムにおける多様な場面での多彩な人々との交流やディスカッション等の中で生じる意見の相違等を体験し、それらを解決していく過程で得られたものであると考察できる。

次いで伸び幅が大きかったのは、「異文化に対応する能力」と「マネジメント力」であった。「異文化に対応する能力」は、事前研修時から4.5ポイントと高い得点であったが、事業を通してさらに伸び、5.1ポイントに達した。「マネジメント力」は、事前研修において、自主研修期間に取組む課題を団員達自身が設定し、それに対して計画的に取り組んだ経験がマネジメント力の成長につながったのではないかと推測できる。

次に、「コミュニケーション能力」と「企画力」である。「コミュニケーション能力」は、プログラムにおいて多彩な人々との交流により、事前研修時よりも上昇したと思われる。また、団内においても一団が団員14名（団長・副団長除く）というコミュニケーションを取り



やすいグループ規模であったことも良い影響を与えたと考える。「企画力」は、文化交流の内容等を決め、行動する中で高まったものと推測する。

最後に、「チャレンジ精神」については、項目の中では伸び幅は一番小さいものの、昨年に比べると0.3ポイント増えている。事前研修時から4.4ポイントと高い得点であったが、事業を通してさらに高水準なポイントに伸びた。これは、研修中を通して、各団員に様々な責任ある役割を担わし、経験のない役割・責任感を与えたことが影響しているのではないかと考える。

総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

「事業全体を事前研修及び出発前、帰国後研修も含めて、どのように総合評価しますか。」との問いに対して、5段階評価の4（良かった）以上をつけた日本参加青年が100%であり、そのうち「良かった」が38%、「大変良かった」は62%であった。

日本参加青年からは「自分たちで考えて行動することが多く、とても良い経験になった。」「行く前から帰った後まで参加者が最大限成長できるよう考えられている」などのプログラムへの高い評価や、「自己を相対化して自身に足りないところを自覚する機会となった」「自分の考えを見直したり、将来の具体的なキャリアプランを考えたりする上でとてもよい刺激になった。」など人格形成の面からの学びの多さを述べるコメントが多く寄せられた。

外国招へい青年からは、「日本という国と人々を外国人旅行者の目ではなく、「内側」から見る機会が与えられた。」「日本に関してメディアを通じた意見ではなく、自分自身の意見を持てるようになったことがうれしい。」「多くの仲間との交流が自らのスキルを向上させ、他者から学ぶ機会を与えてくれた。」というコメントが多く寄せられており、青年との交流や産業、文化、教育施設訪問等各種の活動を通じて、両国青年相互の理解と友好の促進を図ることができたと評価している。また、招へいの際の「国際青年交流会議」によって、日本と6か国の青年の繋がりも生まれたことは、大きな成果と評価している。

以上の評価結果から、「日本と交流相手国の相互理解と友好の促進を図る」との本事業の目的に対して、日本参加青年からは、プログラム内容を含めて、相手国への認識及び理解について、昨年を超える高い評価を受けており、本年度の事業も十分な成果を収めたものと評価する。

また、日本参加青年による能力向上に関する自己評価をみても、事前研修から様々な準備に対応し成果を達成したことがうかがわれ、研修効果は高いものがあったと認識している。